

【2019年7月25日付 紀州新聞掲載分】

シリーズ「結核」⑤

「結核の看護について」

独立行政法人 国立病院機構 和歌山病院
看護部 看護師 大石美紀子

結核は、かつては不治の病と言われていました。しかし、現在はきちんと治療を行えば、基本的には治る病気と考えられています。結核は、咳やくしゃみで空気中に飛び出した結核菌を吸い込むことによって、人から人へと感染する病気で、「感染」と「発病」があります。感染とは「身体の中に生きて結核菌が定着しているが、身体には変化が起きていない」状態で、発病とは「結核菌が実際に身体に悪さをして何らかの変化が起き始めている」状態です。感染しても発病しない人が、感染者のうち90%を占めますが、何らかの原因で体の抵抗力が弱くなった時に発病しやすいと言われていました。子供の頃にBCGの予防接種を受けていても、BCGで結核の発病を予防する効果は大人の場合は期待できません。まずは、免疫力の低下を防ぐことが重要です。一般的ですが、健康的な体を維持するために、栄養、睡眠、運動とバランスのとれた生活を心がけましょう。感染した後、実際に発病しても自覚症状がない場合があります。胸部の写真を撮ると結核が診断できることがあるため、定期的に健診を受けられることをお勧めします。また、風邪の症状や食欲低下、特に咳が2週間以上も続く場合は早期に医療機関に受診しましょう。

結核と診断を受けると、結核菌が排出しなくなるまで陰圧部屋（部屋の外に空気が出て行かないための管理がされている）に入院するところが一般的です。入院により隔離されるという印象をもたれるとは思いますが、N95という結核菌を通さない特殊なマスクを使用することで、病室での面会を行っていただけます。

結核は、6ヶ月から～1年間、毎日きちんと内服を続ければ治せる病気です。2週間で結核菌は人に感染する力が弱まり、痰の検査で結核菌が排出していないことが確認できれば通院での治療も可能となります。しかし、治療中に症状がなくなったからと、自己の判断で内服をやめてしまう患者さんがおられます。内服を途中でやめてしまうと薬に耐性を持ち効かなくなってしまう菌が出現し治療が難しくなります。確実に服用できていることを確認するために、医療者や家族の目の前で内服をしてもらうDOTS（ドッツ）という方法で、服薬支援体制があります。和歌山病院では、DOTSカンファレンスを月1回開催しています。DOTSカンファレンスでは、退院後の治療がスムーズに継続できるよう医師、看護師、薬剤師、栄養士、担当保健師等が患者さんの治療状況の情報交換を行なっています。このように診断から治療が終了するまで、様々な職種の人が一人の患者さんに関わります。患者さんは制限された環境の中、病気や退院後の社会復帰への不安を抱え入院生活を送っています。私たちは治療だけでなく、患者さんの思いに耳を傾けた看護が大切であると考えています。

和歌山病院は、県下唯一の結核病床を有する施設であり、拠点型結核相談支援センター

を設けています。結核に関して気になることがありましたら、専門の医師、看護師が電話の相談を受け付けていますので、お気軽にご利用ください。TEL 0738-32-7033 FAX 0738-32-7034 相談時間 月曜日～金曜日(祝日を除く平日) 午後1時～午後4時。